

ルーラル・ツーリズムの可能性に関する研究

(課題番号 09610166)

平成9年度～平成10年度科学研究費補助金

基礎研究(C)(2)

研究成果報告書

平成12年3月

研究代表者 中島 信博

(東北大学教育学部教授)

東北大学図書



00010174999

附属図書館

---

ルーラル・ツーリズムの可能性に関する研究

---

(課題番号 09610166)

平成9年度～平成10年度科学研究費補助金

基盤研究(C)(2)

研究成果報告書

平成12年3月

研究代表者 中島信博

(東北大学教育学部)

## はしがき

ルーラル・ツーリズム、すなわち農村地域において、観光を通じた地域の活性化はますます大きな課題となってきた。特に、中山間地域の活力をたかめることは、不況下にあってもいよいよ重要な政策課題となってきた。こうした文脈において、当然、多くの地域において、多様な取り組みがみられるのであるが、本研究では、リゾート開発という文脈においてかねてより注目されてきた、岩手県の安比高原スキー場を対象として、実証的に実態を把握することを試みている。

研究代表者が安比高原スキー場に注目しはじめて、すでに15年以上が経過しており、その間には、いわゆるリゾート法の成立があったり、また、リクルート事件の一つの舞台となったこともあった。また、特に、近年は不況の影響により、冬場のスキー客の入り込みが落ち込み、第3セクターの開発企業やペンション、それに近傍集落の民宿など、対応におわれている状況にある。

本研究は、安代町の行政担当者、安代町の農協担当者、およびスキー場に近接する細野地区において、農村社会学的なフィールド・ワークを実施したものである。構造的な不況のもとで、スキー場や民宿の売り上げは3割程度は落ち込んでおり、また岩手山の火山活動をめぐる風評の付加されて、経営は苦しい状況にあるといわなければならない。また、農業をめぐる状況も、主要産業である花卉栽培は横ばいの状態であり、その他の農産物も伸び悩んでいる。

しかし、このような状況下にあっても、「グリーン・ツーリズム」といった政策の導入や、また住民の自立的な独自の対応もみられる。本研究では、特に後者の事例も報告し、住民のたくましい姿に将来の発展のヒントを探ろうとしている。

なお、諸般の事情により、報告書の作成が遅滞し、関係各位にご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。

## 研究組織

研究代表者： 中 島 信 博 （東北大学 教育学部 教授）

研究分担者： なし

## 研究経費

平成9年度	2,800 千円
平成10年度	500 千円
計	3,300 千円

## 研究発表

### (1) 学会誌等

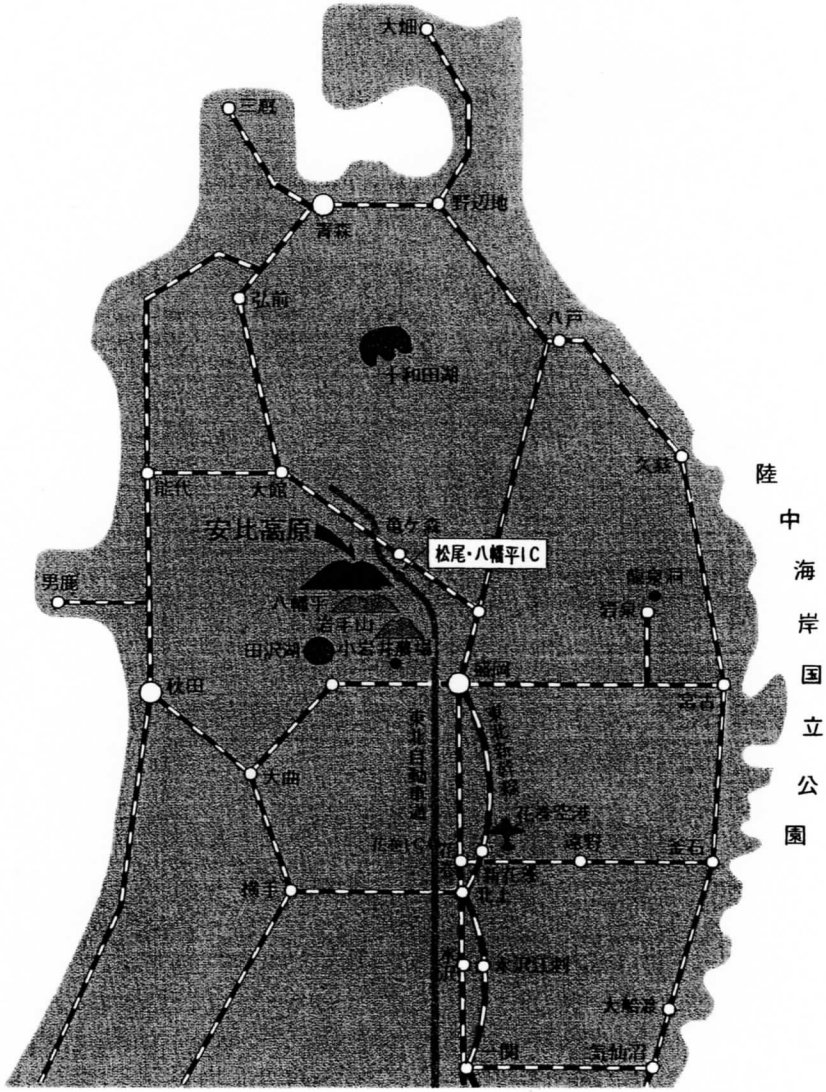
中島信博 A case study on the development of ski resorts in Japan、『東北体育学研究』15(1)、p.33-38、1997年4月

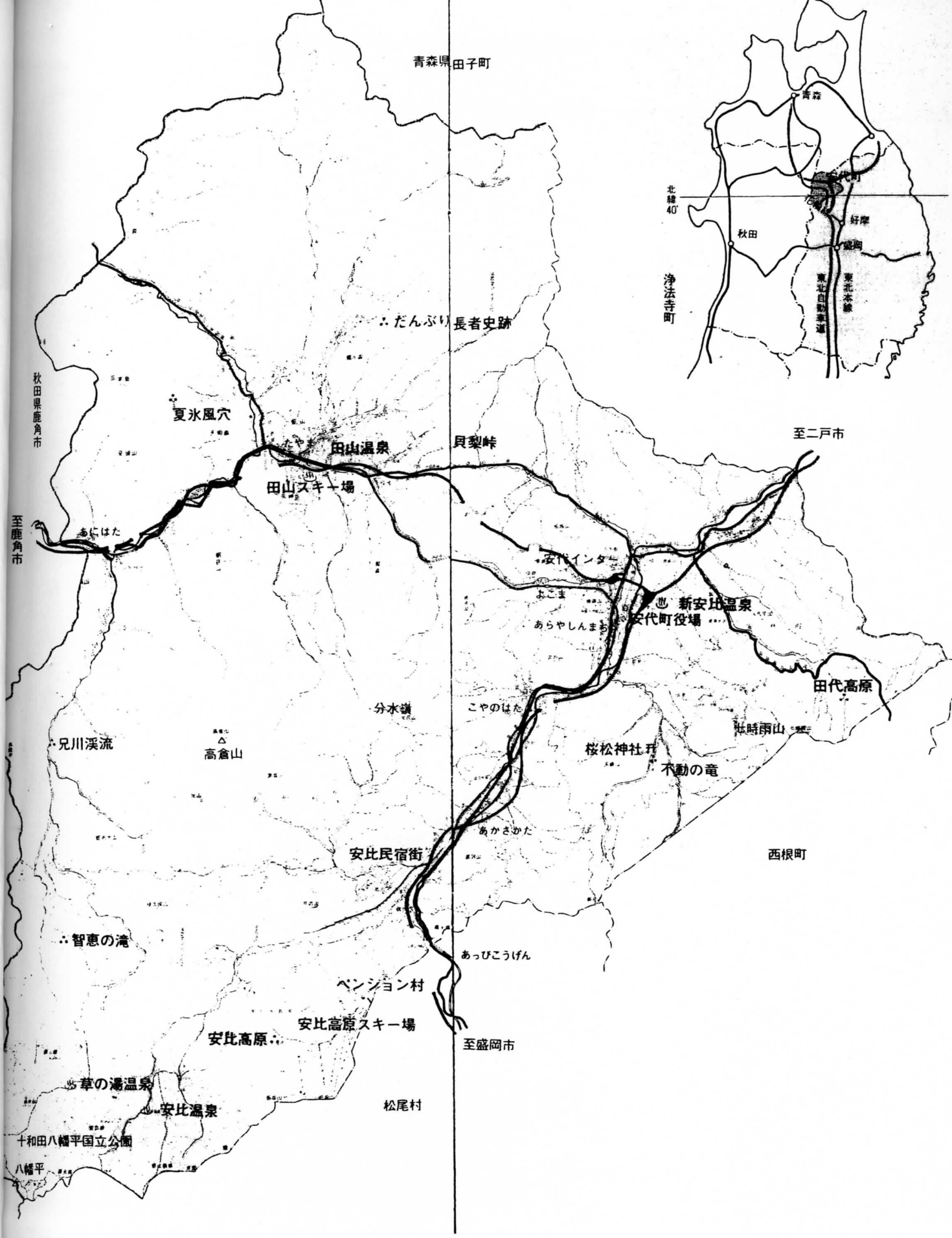
### (2) 口頭発表等

中島信博 A Case Study on the Development of Ski Resorts in Japan, The 9th World Congress of Rural Sociology, University of Bucharest, Romania, July 22-26, 1996

### (3) 出版物 なし

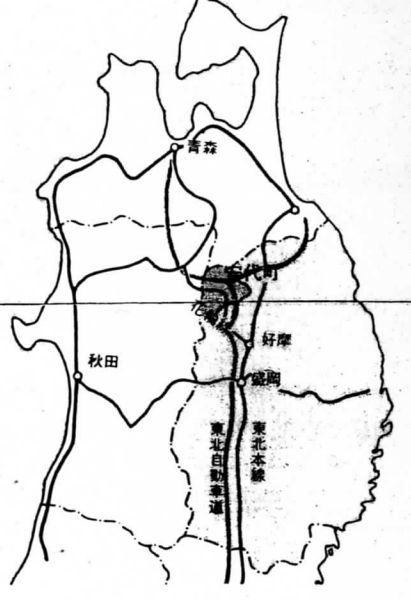
# 安比高原の位置





青森県 田子町

北緯 40°  
浄法寺町



秋田県鹿角市

至鹿角市

至二戸市

夏氷風穴

田山温泉

貝梨峠

田山スキー場

安比インター

新安比温泉

安代町役場

田代高原

兄川溪流

高倉山

分水嶺

こやのはた

桜松神社

不動の竜

時雨山

安比民宿街

西根町

智慧の滝

あかさめた

あびこうげん

ペンション村

至盛岡市

安比高原スキー場

安比高原

草の湯温泉

安比温泉

松尾村

十和田八幡平国立公園

八幡平

## 1. はじめに

農村地域、なかでも過疎化の進行する中山間地域をどのように活性化するか、という課題に対しては、これまでも多くの調査研究がなされてきた。この分野において、特に近年の注目を集めているのが、観光ではないかと思われる。

研究代表者は、こうした研究動向と現実の推移に関心を持ち、特に岩手県の安比高原スキー場に長年にわたって注目してきた。特に、当該地域の農業の現状を把握し、そのうえで観光開発を位置づけようとして、農村社会学的な研究に従事してきた。本研究も、こうした事例研究を継承し、さらに分析を深めようとする試みである。

これまで研究代表者が調査を行ってきた安比高原スキー場は、スキー場開発の「成功事例」として注目されてきたところである。長年にわたって、いわば定点を観測するように、時系列的・歴史的に分析を行ってきたところであるが、本研究では最近の新しい動向を報告したいと考えている。特に、スキー場の近傍集落では、開発のモデル的地域として注目をされ、これまでもいくつかの公的資金による開発助成がなされてきた。そうした蓄積のうえに、農業集落では民宿などの経営が行なわれてきたわけだが、不況の煽りをうけて、経営が苦しくなっている事情がある。特に阪神淡路の震災以降は、スキー場への入り込み客が激減し、民宿経営も新たな段階に入ったといわねばならない状況である。

こうした時代の変化のなかで、農家民宿はいくつかの新たな取り組みを展開しはじめており、そのなかには、一方で国家の政策としての「グリーン・ツーリズム」の導入などがあり、安比高原スキー場の民宿は岩手県のなかでも熱心にこの政策に対応しようとしている。また他方で、都市住民との積極的な交流を、たとえばスポーツを媒介として展開しようという動きもあり、一定の成果もあげるにいたっている。こうした、さまざまな観光関



連の事業がどのような意味をもつのかを、農業と農村の現状に照らして考察することがこ

こでの課題となろう。

## 2. 調査地の概要

まず最初に、本研究で事例として取り上げる調査対象地、岩手県安代町の概況についてふれておきたい。

安代町は奥羽山系の北部にあたり、町内の面積は457.78 K㎡のうち山地率が90%を超す山間地域にある。町内には分水嶺があることから、その限界性を推察することができよう。分水嶺の東は、安比川から馬淵川となって太平洋に注ぐ地帯であり、西側は米代川となって日本海に注ぐ。

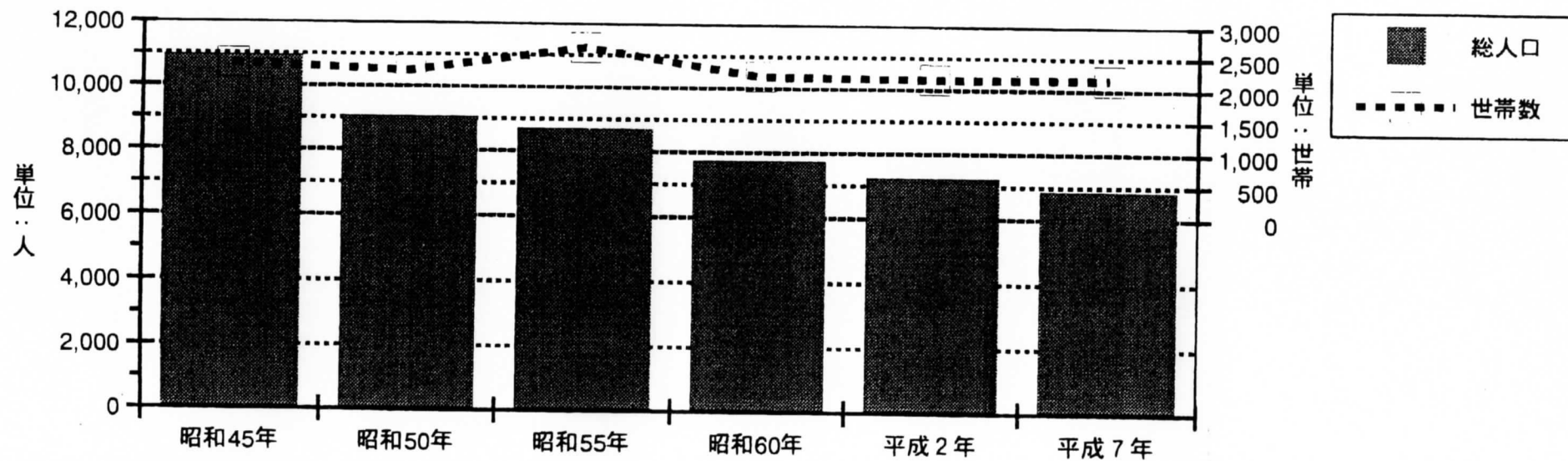
安代町の人口は、平成10年の1月末現在において、7,006人となっている。昭和30年の町制施行以来、人口は一貫して減少しているが、そのカーブはゆるやかにはなっている。また世帯数は、現在は横ばい状態ともなっているが、過疎地域対策緊急措置法には昭和46年、過疎地域振興特別措置法は昭和55年、さらに過疎地域活性化特別措置法には平成2年、いずれも指定を受けている。

人口に関連して、安代町としては若者のUターンに力を入れており、Uターン希望者の台帳を平成9年から作成している。その理由の一つには、みずからの親の面倒をみなければならぬということもあるという。町では登録者に雇用の情報を流すことにしており、これを利用して、平成10年2月以降に、15人が帰郷した実績もある。これには、平成11年に操業した、2つの縫製工場が雇用の創出に役立った事情もある。

縫製工場の誘致にあたっては、補助金制度を活用し、4～5人分の雇用を職業安定所を通じて確保した経緯もあった。1つの工場では30人くらいの募集であり、21人を雇用したのであった。経済情勢は依然として厳しいが、しかし将来を見越してこの時期に投資をするという考えの工場だった。一流ブランド品を作っていて、40人規模の工場を目指している。

しかし、今は子どもたちが大学まで進学する時代を迎えており、そうした子弟の多くは卒業後に、地元へ還流するのが依然として難しい状況となっている。地元には企業が少な

図表一人口・世帯数の推移



資料／国勢調査

年齢別階級

		昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年
年少人口 (15歳未満)	男 人	2,460	2,383	1,963	1,527	1,136	915	716	611
	女 人	2,351	2,183	1,829	1,398	1,097	869	692	579
	計 人	4,811	4,566	3,792	2,925	2,233	1,784	1,408	1,190
	(構成比 %)	38.2	36.5	32.6	28.5	24.7	20.5	18.2	16.4
	(前回調査比 %)	-	- 5.1	- 16.9	- 22.8	- 23.6	- 20.1	- 21.1	- 15.5
生産年齢人口 (15~64歳)	男 人	2,605	3,517	3,440	3,045	2,788	3,035	2,576	2,265
	女 人	3,569	3,758	3,639	3,428	3,067	2,844	2,545	2,356
	計 人	7,174	7,275	7,079	6,473	5,855	5,879	5,121	4,621
	(構成比 %)	56.9	58.2	60.9	63.0	64.7	67.5	66.1	63.7
	(前回調査比 %)	-	1.4	- 2.7	- 8.6	- 9.5	0.4	- 12.9	- 9.8
老年人口 (65歳以上)	男 人	280	317	335	406	444	456	514	608
	女 人	333	343	419	466	520	595	705	834
	計 人	613	660	754	872	964	1,051	1,219	1,442
	(構成比 %)	4.9	5.3	6.5	8.5	10.6	12.0	15.7	19.9
	(前回調査比 %)	-	7.7	14.2	15.6	10.6	9.0	16.0	18.3
総人口	合計	12,598	12,501	11,625	10,270	9,052	8,714	7,748	7,253
	前回調査比 %	-	- 0.8	- 7.0	- 11.7	- 11.9	- 3.7	- 11.1	- 6.4

(資料 国勢調査)



## ● 中学校卒業後の状況

(単位: 人・%)

年 度	卒業 者数	進学 者数	入 学 機 関 等 者 数	就 職 者 数	そ の 他	進 学 率
40	380	143	0	174	63	37.6
45	283	156	2	51	74	55.1
50	210	165	0	18	27	78.6
55	169	160	5	2	2	94.7
56	153	142	8	2	1	92.8
57	117	112	3	2	0	95.7
58	145	137	4	3	1	94.5
59	136	133	3	0	0	97.8
60	141	135	2	1	3	95.7
61	121	117	3	0	1	96.7
62	124	119	3	2	0	96.0
63	102	98	3	1	0	96.1
H元	95	92	2	1	0	96.8
2	97	94	2	1	0	96.9
3	105	104	1	0	0	99.0
4	84	82	0	2	0	97.6
5	82	80	2	(1)	0	97.6
6	97	96	1	0	0	99.0
7						

く、また農業を生業とすることも難しい。勤め先としては、せいぜい、役場、農協くらいである。スキー場関連では、安比総合開発株式会社があるものの、平成9年は求人がなかったという厳しさである。そんななかで、老人保健施設が平成10年2月にオープンする予定であり、約50人くらいの雇用を町内から期待しているという。この施設の誘致にあたっては、安代町では用地を斡旋したり、水道や道路を町が負担するなどの優遇策をこうじている。10億くらいの初期投資であり、いずれは福祉の基地として安定した職場の一つとしたい意向もあるといえよう。

似たような施設だが、老人福祉センターも建設中である。これは、「高齢者生活センター」と呼ばれる冬期間のみの居住施設であり、公民館に併設されるものである。

安代町の高齢化率は26%であり、岩手県下でも7～8番目に高い、いわば長寿の町である。独居老人も約200人に達しており、高齢化への対応が町の課題である。しかし、中央からの補助金が減少する傾向にあり、介護保険制度がスタートすれば、厳しい情勢となることも予想される。

以上のようななかでも、外国人労働者の流入もみられる。毎年2～3人が来ており、中国からが多く、韓国からも1人、という状況である。

また関連して、Iターンの打診もあり、すでに1家族が都会から移住してきた。

人口に関連して、学校の状況を紹介しておきたい。

町内にある小学校のうち、五日市、浅沢、荒屋の3校の統合が問題として論議され、2ヶ所が候補地として決定されたが議会は通らず、現在（平成10年2月）は、振り出しに戻った状態である。5校を一つにという案も検討されている。この小学校統合については、高齢者に思い入れもたいそう強い。

新町あたりに、学校の統合用地を2～3ha確保する話がある。小学校、幼稚園、保育所、給食センター、体育施設、プールなどを建設する構想である。

### 3. 安代町における農業の概況

次に、安代町における農業の概況をみておこう。

まず、町の主要産業ともいえるべきは花のリンドウ栽培である。リンドウは、125ha の栽培面積となっており、9億5千万円の売り上げがあり、その出荷量において全国一（全国の15%）を誇ってきた安代町である。栽培農家は190戸におよび、市場も全国にわたっており、ブランドとして大きな市場を席捲している。しかしながら、近年は頭打ちというのが全般的趨勢でもある。

一つには、岩手県がリンドウの作付けを奨励してきたことから、県内の他の生産地が増えてきて、栽培面積の増大が影響しているといわれる。また、一つには、盆や秋の彼岸に集中する消費の特性があり、値崩れが起こることにもよっている。特に、後者は平成9年度からみられるようになった傾向である。ただ、価格に波があり、沈む場合があるとはいえ、他の生産地よりは高値で取引されるのが現状である。

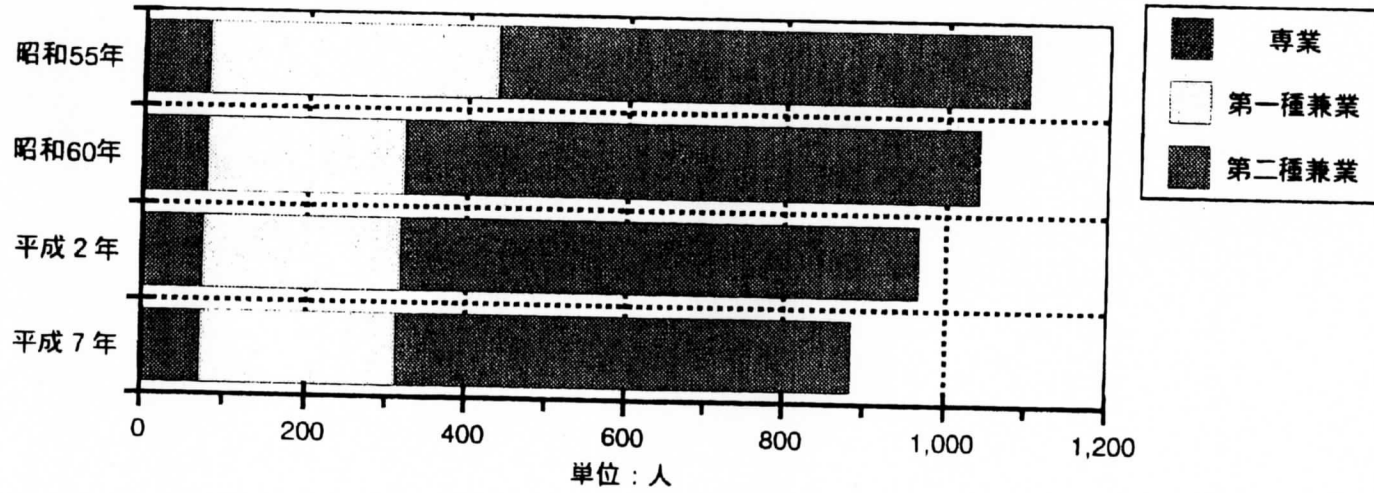
安代町は、花卉開発センターを町独自に設立するほどの力のいれようであり、登録品種を申請しつつ、新品種への切り換えによって売り込みを確保しようとしている。「安代の夏」など3～4種を、独自のブランドとして開発し、実際に人気も出てきており、商品価値は抜群であると町民も誇りにおもっている。

リンドウの開発は、大手の種苗会社も費用がかかるがゆえに手をつけない分野である。安代町のリンドウ農家は、花1本から1円、計1千万円くらいを町の花卉センターへ還流させてこれに協力してきている。

リンドウ栽培は50万本を出荷する農家から、数万本の規模までさまざまだが、すでに30年近くを経過している。栽培農家の高齢化も進行しており、更新の時期を迎えつつある。こうした情勢のなか、規模が縮小となるかどうか気がかりな点である。ただ、生産者数は減少するかもしれないが、規模拡大を進めることで、栽培面積を維持したいというのが、町の担当者の構想である。



図表一 専兼別農家戸数



資料／農業センサス



また、リンドウは海外との交流も、町独自に行なう実力を有している。相手国はニュージーランドであって、冬に入荷してくる。

花卉に関連しては、花卉部会の青年部が7～8人で、花壇用の鉢物など、施設園芸に取り組みはじめており、次世代への継承として期待が寄せられている。

リンドウは、安代町地域のまとまりの良さと、高速道路が近いという地の利、それに冷害に強いという作物の特性などが相乗的に効果を生んで、安代町が全国一の産地となったといわれる。

リンドウ以外の農産物については、以下のような状況である。

かつて、リンドウが主要作物となるまで、安代町ではタバコが重要な作物であった。しかし、タバコはほぼ横ばい、ないしは若干の減少傾向といえる。安代町全域で、約3億円弱の規模である。栽培農家は平成11年で104戸で若干の減少が見られた。栽培農家の高齢化が進行し、60～70歳の高齢者が多く、45歳以下は皆無であって、面積を縮小する傾向がある。また、新規に参入する農家もみられない。タバコの栽培では、「まける、汚れる、かぶれる」ところがあって、若い世代は花卉栽培に流れるという。経費率をみても、あるいは共済制度や補助制度をみても「いい作物」なのだが、新規参入はみられない現状である。

安代町内でも、浅沢や五日市といった地区はタバコと水稻の生産地である。花卉栽培はそれほどでないといえる。タバコは価格が保証されており出荷経費も農家が負担せずにするため、安定性にすぐれ、労働力も分散できるというメリットがある。

次に、コメについてであるが、自然改廃分が減少する傾向にあり、耕作放棄もみられるという。カケハシという品種が6～7割を占めているが、細野などの寒冷地一帯ではキララという北海道の品種が作付けられている。その他、タカネミノリ、岩手26号があり、土地の条件がよいところでは、アキタコマチの作付けもみられる。

減反の対策として、植林だと1年間、契約金が出るので、10年近く前から山葡萄を勤めているところである。そのため、山葡萄の作付けが急増し、平成8年は8町歩に及ぼうとしている。これは葛巻のワインの原料として全量買い取りで出荷しているが、将来は地元で加工することも考えたいとのことである。

減反はその他、水張り（調整水田）で対応しているところもある。

コメの受委託では、引き受ける農家が少ない。コメの補助事業がないことが一因であるとの説明であった。

圃場の整備は進められていて、たとえば横間などで2～3反歩区画で実施されている。1～2割以上の負担を農家につけないようにするため、道路は町が買い上げるという方式である。圃場整備には農地を守るという意味が込められていて、高齢化に対応するためには、良い条件の土地を確保することが大切だからである。

かつては、安代町における主要な産業であった畜産はどうであろうか。

畜産については、短角牛はここ3年くらいは横ばい状況である。昭和62～63年当時は高値であったが、平成3～4年の自由化により、生産が下落した。農家戸数も減少傾向にある。

短角牛の生産は、横ばいとはいえ、価格は下落傾向にある。こうした状況なので、牧野は財産管理という意味合いが強くなっている。たとえば、新町の牧野組合で、梅の木を、100本植えた例があり、平成10年には400～500本を追加する予定である。梅はいろいろに加工できるので、シソ巻きとかワインとかを考えているとのことである。管理までは牧野組合でやることになるだろう。観光の一環として考えており、県内にはまだその産地がないことから本気でやれば収入が見込めるかもしれないとふんでいる。

その他の農産物では、ソバが県内一の生産量となっており、農協も力を入れて機械化などに取り組んでいる。

土地利用型農業としての野菜栽培では1億2千万円の売り上げがある。たとえば、レタス、キャベツなどが多い。昔はレタスが多かったのだが、近年はソバへと転換してきている。その背景には、価格の低迷がある。この分野は、タバコと同様に、若い人がいないので、増える見通しはないとのことである。

農家の類型としては、水稲+リンドウ、葉タバコ+水稲、水稲+野菜、水稲+タバコ+野菜、リンドウ専作などがあるといえる。

安代町の農業は、基本的には花卉中心である。10年くらいで世代交代期をむかえるため、その時期に後継者を確保できるかが重要な要素となるであろう。

※主要品目の作付面積及び収量 単位：ha, kg /10a, 千本

品 目	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年	9 年
水 稲	421 466	421 3	421 480	418 541	411 452	394 510
葉たばこ	63 330	62 310	62 348	62 348	55 313	55 300
レ タ ス	46 1,724	29 2,091	26 1,890	21 2,050	20 1,430	12 2,077
りんどう	98 17,418	105 15,380	112 19,220	115 22,140	120 20,418	125 24,283

※平成9年度・農協販売実績

品 目	金額 (百万円)	率 (%)
米	257	12.7
葉たばこ	283	13.9
畜 産	256	12.6
花 き	1,091	53.7
野 菜	130	6.4
きのこ	13	0.7
計	2,030	100.0

図表一 個別農産物粗生産額の順位と構成費（上位10位）

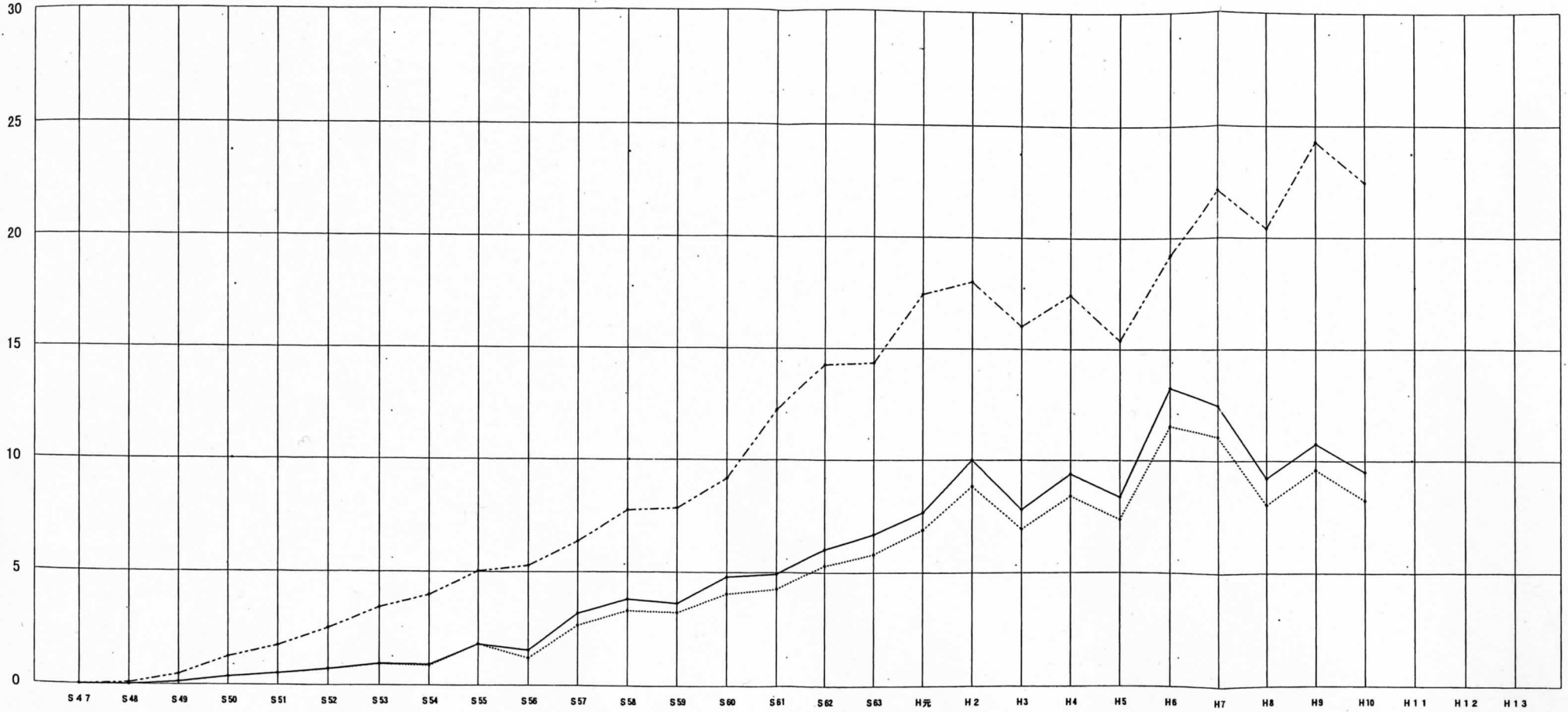
順位	農産物名	粗生産額	構成比
	粗生産額計	2,859	100.0
1	りんどう	1,201	42.0
2	米	507	17.7
3	葉たばこ	332	11.6
4	肉用牛	235	8.2
5	生乳	94	3.3
6	レタス	63	2.2
7	ほうれんそう	49	1.7
8	ゆり	45	1.6
9	だいこん	41	1.4
10	すぎ苗木	33	1.2

（単位：100万円、％）

資料／岩手県生産農業所得統計（平成7年）

# 花き生産販売の推移

--- りんどう 販売本数(百万本)    - - - りんどう 販売額(億円)    — 花き販売額(億円)



年次	S 4 7	S 4 8	S 4 9	S 5 0	S 5 1	S 5 2	S 5 3	S 5 4	S 5 5	S 5 6	S 5 7	S 5 8	S 5 9	S 6 0	S 6 1	S 6 2	S 6 3	H 元	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 1 0	H 1 1	H 1 2	H 1 3
総会員数(人)	17	22	27	40	46	62	83	91	103	106	110	108	130	157	157	170	181	183	193	192	192	184	164	189	194	196	196			
りんどう栽培面積 ha	2	4	5	6	10	17	22	24	25	35	39	42	45	55	62	67	72	75	82	92	99	105	112	115	120	125	125			
りんどう販売本数(万本)	0	47	124	174	250	342	398	503	528	636	775	784	917	1,225	1,425	1,434	1,744	1,801	1,862	1,742	1,538	1,922	2,214	2,842	2,428	2,248				
りんどう販売額(千円)	1,251	12,550	36,520	52,141	70,140	93,368	87,130	181,913	120,637	262,735	329,062	322,311	404,130	425,534	529,497	581,450	688,997	862,093	892,617	839,678	735,766	1,153,113	1,106,988	801,862	959,943	824,865				
花き販売額(千円)	1,251	12,550	36,520	52,673	71,400	95,054	92,000	182,154	154,000	316,000	379,000	363,000	486,294	492,103	601,038	667,644	766,188	1,001,063	779,000	938,124	837,749	1,324,201	1,248,718	921,834	1,076,004	951,149				

#### 4. 安代町における観光開発

安代町企画商工観光課の担当者は、スキー場による観光開発について、全国的にブームが終わったという認識を示していた。かつて、安比の開発に勢いがあったころ、次の候補地として熱い視線を送られていた安代町内の七時雨の開発も立ち消えとなっている。

安比高原スキー場においても、平成4年のピーク時には150万人の入り込み客があったものの、平成8年／9年のシーズンでは117万人にまで落ち込んでいる。一応は100万人の大台をキープしているものの、売り上げは下がってきている。冬期以外の入り込みに、若干の伸びは見られるものの、急激な落ち込みを埋め合わせるには極めて不十分である。

かつてゲレンデを拡大する目的で設けられた「セカンド安比」も閉鎖されており、ザイラー・ゲレンデをメインとして営業している。スキー場を経営するのは、第3セクターの安比総合開発株式会社であるが、新たな投資は、平成7年にオープンした温泉館にとどまっている。

安比高原スキー場の実績をたずねたところ、平成8～9年シーズンは前年度に較べて、入場者で4%、売上高で6%、宿泊で10%と、いずれも減少したという。ただし日帰りの客は横ばいという状態である。東北地方全体では10%の減少といわれており、その中では安比高原スキー場はまずまず健闘したところではないかと、安比総合開発の担当者は自己評価する。

近年のトピックスとしては、温泉館のパティオ・アネックスが6億円で建設されたことをはじめとして、コンドミニアムの第3群としてアネックス1が平成8年にオープンしたことがあげられていた。いわば不動産事業によって、経営を維持しているという姿が浮かびあがってくる。コンドミニアムはこれまでに、グランド本館のタワーやヴィラの1～3があったので、それに続く建物という意味で、第3群と呼ばれる。

景気の冷え込みのなかでの起死回生のねらいをこめて、中心街区のゾーン（温泉館の周り）においてコンドミニアムの売り出しが行なわれている。



## ●観光客推計入込数

(単位：人)

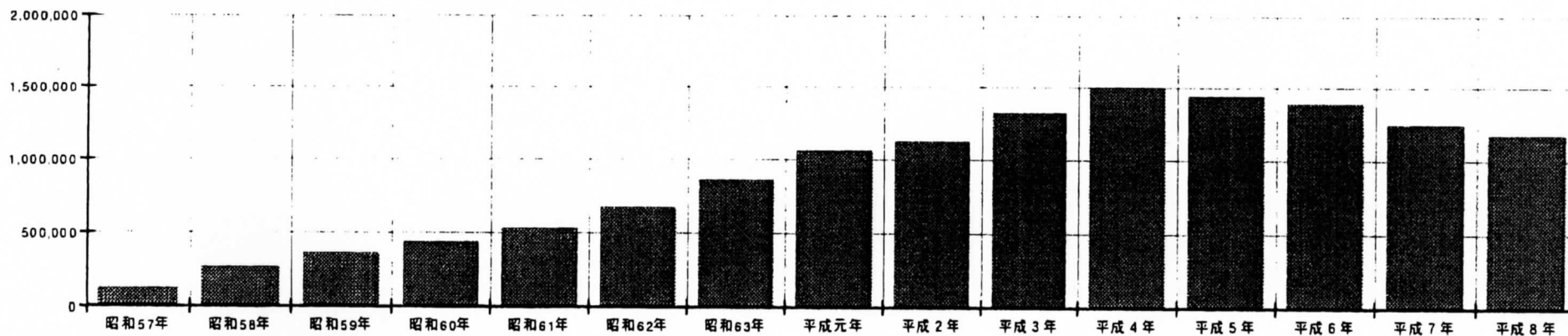
年次	町内入込数	訪スキー客	宿泊施設		
			軒数	収容人員	
昭和53年	93,660	61,340	11	330	
54	54,505	22,390	11	330	
55	62,298	33,000	14	419	
56	171,358	66,074	16	504	
57	287,432	156,449	19	666	
58	428,438	322,186	23	824	
59	475,685	385,296	28	912	延宿泊客数
60	586,450	494,568	44	2,295	45,550
61	681,913	595,277	47	2,410	70,507
62	799,119	704,467	53	2,669	86,726
63	1,061,942	943,201	57	3,134	153,854
平元	1,264,821	1,136,513	64	4,392	233,141
2	1,282,761	1,108,895	69	4,947	259,461
3	1,625,048	1,430,238	70	5,083	325,438
4	1,772,618	1,491,978	71	5,213	358,868
5	1,702,966	1,439,497	77	5,333	453,159

(岩手県観光統計概要)

安比高原スキ一場入場者調

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	合計
S56	入場者数		10,431	52,357	34,528	24,209	3,834	0	125,359
	営業日数		21	31	28	31	30		141
	平均入場者数		497	1,689	1,233	781	128		889
S57	入場者数	1,932	27,845	98,873	71,110	60,441	12,780	0	272,981
	営業日数	5	31	31	28	31	29		155
	平均入場者数	386	898	3,189	2,540	1,950	441		1,761
S58	入場者数	2,125	39,332	131,659	86,452	69,745	24,666	3,365	357,344
	営業日数	5	31	31	29	31	30	6	163
	平均入場者数	425	1,269	4,247	2,981	2,250	822	561	2,192
S59	入場者数	0	30,903	150,773	117,754	114,097	22,616	1,078	437,221
	営業日数		22	31	28	31	30	6	148
	平均入場者数		1,405	4,864	4,206	3,681	754	180	2,954
S60	入場者数	442	62,570	163,297	134,077	143,007	28,235	2,448	534,076
	営業日数	3	31	31	28	31	29	6	159
	平均入場者数	147	2,018	5,268	4,788	4,613	974	408	3,359
S61	入場者数	1,607	90,163	205,579	169,379	175,399	30,501	0	672,628
	営業日数	3	31	31	28	31	29		153
	平均入場者数	536	2,908	6,632	6,049	5,658	1,052		4,396
S62	入場者数		81,926	304,830	216,985	217,102	40,190	246	861,279
	営業日数		27	31	29	31	29	1	148
	平均入場者数		3,034	9,833	7,482	7,003	1,386	246	5,819
S63	入場者数	482	115,190	338,786	314,829	266,512	28,515	0	1,064,314
	営業日数	5	31	31	28	31	16		142
	平均入場者数	96	3,716	10,929	11,244	8,597	1,782		7,495
H1	入場者数		159,015	406,762	325,004	218,282	14,267	0	1,123,330
	営業日数		30	31	28	31	15	0	135
	平均入場者数		5,301	13,121	11,607	7,041	951		8,321
H2	入場者数		123,002	459,833	396,182	309,986	35,711	1,218	1,325,932
	営業日数		16	31	28	31	30	6	142
	平均入場者数		7,688	14,833	14,149	10,000	1,190	203	9,338
H3	入場者数	759	206,539	444,143	434,273	356,334	56,359	5,910	1,504,317
	営業日数	1	31	31	29	31	30	5	158
	平均入場者数	759	6,663	14,327	14,975	11,495	1,879	1,182	9,521
H4	入場者数	3,213	176,200	453,901	404,944	331,000	64,249	11,019	1,444,526
	営業日数	3	31	31	28	31	30	5	159
	平均入場者数	1,071	5,684	14,642	14,462	10,677	2,142	2,204	9,085
H5	入場者数	0	161,428	423,630	382,980	357,200	62,400	4,212	1,391,850
	営業日数	0	31	31	27	31	30	5	155
	平均入場者数	0	5,207	13,665	14,184	11,523	2,080	842	8,980
H6	入場者数	0	166,783	323,322	331,431	312,155	50,488	3,296	1,247,475
	営業日数	0	31	31	28	31	30	5	156
	平均入場者数	0	5,380	12,365	11,837	10,070	1,683	659	7,997
H7	入場者数		148,169	350,457					
	営業日数		23	31					
	平均入場者数		6,442	11,305					

図表一安比高原スキー場の入込み数



資料／岩手県観光統計概要

温泉館への入り込みは平成7年で8万人、8年は12万人を見込んでおり、またアネックス2の72戸も売り出し中であり、まずまずの売れ行きとのことであった。

ホテルの本館とタワーは安比のシンボルとして建設されたのであり、絵になる目立つ存在として位置づけられている。コンドミニウムは高級リゾートのイメージを付加されており、まずはヴィラの1～3棟がマンション・タイプとして建設された。これは長期滞在を目的としており、キッチンや畳の部屋でゆったりとできる部屋のつくりとなっている。家族とかグループでの利用を念頭として設計されていたといえる。

10年前の構想では、パブリックなスペースを中心に置き、周囲に、ペンション、別荘、ホテルなどを配置する「街」という考え方であった。大型の温泉も中心に置き、どこからでも入場できる温水プール、買い物広場、ショッピング・モール、レストラン街などが置かれるという構想である。しかし、5年ほど前から、リスクな事業として迷いもあったので、構想を転換して、負担にならない規模で事業を開始しようとしたものである。いわば、毎年やれることを、やれる範囲内でやることにして、コンドミニウムを採用することにした。しかし、現在の経済情勢では高級なものは売れないという配慮から、マーケット調査を行なって、2千万円以下の低価格帯を設定したのであった。これにより、ホテルは3,500～5,000万円、サイズは12/13坪～17/18坪、豪華・便利・快適なものとなり、大企業の山の家としてリッチな層が購入することとなる。またヴィラ・シリーズは、1,500～3,500万円の価格帯で、いろんなタイプの部屋があり、企業より個人客が多い。バブル当時ということも手伝って、サラリーマン層でも購入が可能なものであったといえる。最後に、アネックスは価格としては、1,800～1,900万円で、広さは10坪くらい、タイプは単一で、東北地方の一般ファミリー層をターゲットとするものであった。

平成8年12月に温泉館がオープンしているが、12の棟と廊下でつながっていて、昔の温泉旅館の現代版というイメージで建設されている。廊下をつたって、いろいろなレストランで食事ができるという仕掛けが凝らされている。

全国ではリゾートにおける建設はとまっており、多くの場合、値引き合戦をしているの

が現状だが、ここ安比だけが、いまでも建設を行なっている。その意味では、温泉館の建設はペンション・オーナーの間でもよろこばれていて、大きな風呂にゆったりと入れるという要望に応えることにも役立っているという。

バブル当時とその後を比較してみると、ホテルは18,000円から13,000円ないし15,000円に、そしてペンションは8,500円から7,000円、民宿は6,500円から5,500円へと価格が下落している。

これからは、従来のように初級・中級・上級のゲレンデが用意されていたスキー場としてではなく、たとえばモーグル、深雪、グルーミング、クロス・カンントリー、ソリなどの楽しみに応じていろいろな空間を選べる「スノー・パーク」としてとらえたいという。そのためには、用具のレンタルや、スクールなども、多種多様なニーズに対応していく予定である。ウインター・リゾートのあり方じたいが変化している。平成5～6年頃から、急速に変化してきたという実感をもっている。

たとえば、アメリカはカービング・スキーに90%くらい変化したし、ボードも10%くらい普及している。次は、カービング・スキーにいくと予想されるのである。

夏は、これまではスポーツや音楽のイベントが主だったが、これからは花や自然を主体とすることを考えている。たとえば「フラワー・マップ」を作成したりといったアイデアがある。その点で、こうした分野で案内のできるインストラクターを配置して事業化することも考えられる。既に、ゴルフ、テニス、馬術などのインストラクターは有資格者が社員にいたので、それを拡大することになる。

自然ということでは、牧場体験学習も考えている。たとえば、ワーク・キャンプ事業とか、トウモロコシを採ったり、種まき、草取り、バターやチーズ作りといった遊びも考えられる。これらはグリーン・ツーリズム事業ともいえよう。また、小学校や中学校の修学旅行のニーズもあると見越している。ソバ打ち体験コースや花壇のガーデニング等々、自分の手をかけて楽しむことを、リゾート事業に取り入れる必要があると認識している。その他、弘前の桜、十和田の紅葉、青森のネブタのように、レンタカーで遊びに行けるコー

スを準備することで、安比を拠点とした「拠点型観光」も構想している。

冬のヒット商品としては、JRと組んだパッケージの「ホワイト・スノー安比」(27,900円)がある。これは、安比だけでなく、盛岡エリアを対象としており、利用者の半分は首都圏の客であるという。

ともかくもこのような不景気の時代だが、海外との競争も考慮しつつ、業界のなかでは「最後に死のう」と言いかけながら奮闘しているとの弁であった。

スキー客たちはスキー場で金を使わなくなってきており、この傾向はボーダーたち若者に徹底しているという。

民宿はどうだろうか。

近年も1年に1軒くらいの割合で増えてきた民宿だが、ここにきて新規の参入はピタリととまったという。スキー客の入り込みが、300万人までいくのではと考えていたような盛り調子の時代には、いずれ100軒になると思われていたほどであった。民宿の間でもこれまでの営業努力の差が顕在化してきたと言えるだろう。

民宿は去年とほぼ横ばい状態である。スキー場の入り込みは、去年と比べて17%のダウンという。こういう状況なので、民宿の新規開業はみられない。民宿のなかでも差が出てきており、たとえば、学生を泊めたところが、いまとなって潤い始めている。また、自衛隊の関連も訓練として入ってきている。

正月は関東、あとは近県、なかでも仙台が多い。2～3月は、安比高原スキー場は関東や東北の学生が多い。週末は近県からの客が多い。以上が民宿からの聞き取りで多かった回答である。また、家族連れでは子どもがある程度大きくなないと来ないものである。

不景気となると、一般社会人や自営業が減少する。しかし、公務員はそんなに影響がないようである。若い会社員をみると、いわゆる「アルバイト的な収入」がなくなっていることがわかる。時間はあっても金がないというのが、この層の特徴である。

10年前に来ていた人たちが、スキーから退いていっているようにみえる。体力的にも影

響があるのかもしれない。

民宿はこれ以上は増えないと思われる。ややもすれば、客の減少により民宿を休業するところも出てくるとと思われる。

ペンションではオーナーの交代もみられ、民宿のように互いに手を取りあって助け合うのが難しいという事情もうかがわれる。

この意味からすると、安代町のなかでも、田山地区はいわば「行政主体」とでもいうべき形で、開発が行なわれてきたといえるであろう。すなわち、規模の大きいスポーツ競技大会にからめて施設づくりがこれまで行なわれてきたのであり、近年は、冬期の施設のみならず、グラウンドを整備したり、交流館の建設、スキー・センターの建設、ジャンプ台の改修などが行なわれてきた。田山地区の民宿では、1軒が撤退し、新たに1軒が増えたというのが現状である。

安比高原スキー場に関連して、温泉の開発をみてみよう。細野地区のなかに、次々と主要には民間（地元民）の手で、温泉掘削が進められたのが、近年の特徴である。細野の元村の奥には、上の湯ができ、さらにあと1軒、民宿かわのがボーリングを終えていて、温泉館を開業する予定である〔平成10年2月現在〕。

また、かつてより町の経営による林業センターには、奥の牧場から温泉が引かれてもいる。安比グランド・ホテル、安代町による「綿帽子館」、トピア、安比温泉、田山温泉など、安代町内を見渡してみると、7～8ヶ所の温泉が整備されたことになり、観光客誘致にとって、温泉が極めて有効な施設であると地元では認識されていることが明白である。しかし、当然ながら、客の入り込みという意味においては、互いの施設が奪い合うという結果も予想されるのであって、町当局としては、なんとか相乗効果を期待したいと述べている。

ホテルは、かつては地場産品を土産品として販売するには「シビア」だったが、近年はカウンターの前に置くことができるようになっている。

## ●安比総合開発の経緯

安比総合開発の主な経緯は、以下のとおりである。

図表－安比高原開発の経緯

年代	事業内容など
戦前	国有牧野
戦後	開拓入植と牧野組合への払下げ
昭和40年代～	農地の売却
昭和54年	林野庁のレクリエーションエリア指定
昭和55年	安比総合開発株式会社設立
昭和56年	安比高原スキー場、民宿2軒開業 以後年々増加
昭和57年	東北自動車道西根－安代間開業
昭和60年	東北新幹線上野乗入れ 東京よりスキー場までの直通夜行バス運行開始 ペンション用地にペンション11軒が開業、以後年々増加 ホテル安比グランド営業開始
昭和61年	サイラーゲレンデ新設
昭和62年	日本初の8人乗りゴンドラリフト新設
昭和63年	安代町で第43回国民体育大会冬季大会スキー競技会開催 セカンドA P P I新設、ホテル安比グランドヴィラ1開業 シーズン総入場者、100万人突破
平成元年	ゴンドラ夏期営業開始、テニスコート19面オープン
平成2年	分譲リゾートマンション「メゾン安比1&2」建築
平成4年	シーズン総入場者、150万人超える
平成5年	増加を続けてきたシーズン総入場者が初めて減少し144.3万人となる
平成6年	セカンド安比コース増設事前協議了承
平成8年	シーズン総入場者、減少傾向続き117.5万人となる。

資料／安代町企画商工観光課資料ほかより作成



安比高原スキー場開発に伴う関連産業の新規発生

	事業主体	内 容
安代町漆器センターの発 足	安 代 町	58年設立 安比塗の商品開発
㈱安比の設立	地元青年	58年設立 土産品開発(木工品)
ラベンダーの商品化	地元主婦	59年商品化 土産品開発(ポプリ等)
㈱あしろ工場の設立	民 間	59年設立 手づくり家具の販売
温 泉 開 発	安比総合開 発、他3社	60年試掘開始 7ヶ所成功
皮革キーホルダー等	地元個人	59年開始 土産品開発
マルメロの商品化	//	62年開発 土産品開発
さき織り商品化	地元主婦	60年～ 土産品開発
りんどう染め商品化	//	62年～ 土産品開発
安比クラフト協同組合 設 立	地元林業社 関係業社	62年～ 新商品開発、販路拡大
スキーレンタル	商工会青年	63年～ 民宿客を対象に スキーレンタル
銀ザケ養殖	民 間	63年～ 食材開発、中間育成
カジカ養殖研究	安代町 観光協会	63年～ 自然保護、食材開発
新安比温泉開業	民 間	63年 温泉ボーリング成功 による定員115名のホテル 開業
田山温泉開業	//	63年 温泉ボーリング成功 による定員40名の旅館開業
トピア温泉開業	//	平成元年 温泉ボーリング 成功による定員115名の旅 館開業
そ の 他	//	喫茶店、ディスコ、パブ、ド ライブイン、ガソリンスタ ンド、ペンション街の農産 物日曜市土産品店等

## 5. グリーン・ツーリズム

グリーン・ツーリズムは体験民宿の収入を農業収入とみる方式といえる。スキー場開発によって民宿が増えていたことも背景にあり、農業を組み合わせることにより、一つの経営形態とみる。

低利の資金を活用することもでき、国の支援を受けて、担い手農家の育成がはかられていくこととなる。これまでのところ個人に対する補助事業はなく、これからは、4～5人の組合や組織に対する補助事業が望まれる。

グリーン・ツーリズムは農地に付加価値を見いだすことでもある。農業の魅力を観光農業として売り出すことである。農業のみでの自立が困難な地域において、その自立を補うために他所の力を農業に入れていくという考え方といえよう。観光を大きな力として農業や林業を活性化しようとするのが目指されている。

国の事業としては、平成5年度から取り組まれている。農山漁村でゆとりある休暇を推進する事業であり、平成7年4月に法律が制定された。

岩手県としては平成9年に協議会を設置し、県内市町村と農林漁業団体、そして観光業者が参加して取り組みをはじめたのであった。

予算化がなされたのは平成10年度からであり、①体験インストラクターを登録するといった人材の育成、②パンフレットや情報誌の発行やホームページの開設（平成11年5月17日）あるいは東京でのイベント開催といった情報発信、そして③人々に認知してもらうための普及啓発の、3本柱を事業として展開してきた。

グリーン・ツーリズムという言葉は、平成4年度から公的に使用されはじめたといわれている。その意味では、農業の「新政策」とともに導入された事業であるともいえる。

財団法人全国農林漁業体験協会には誰でもが加入できるが、岩手県からは32の加入をみており、東北で最多となっている。全国では、長野県からの参加が目立っている。

主な事業では、交流施設やターミナルといった体験施設の設置、農産物の直売、あるい

は農家レストランなどがみられる。民宿という宿泊事業に農家が参入するには、やや垣根が高いのが現状である。

意外に多いのが修学旅行の受け入れ依頼である。これまでのような観光地めぐりではなく、体験農業に関心が高まっている。たとえば、雫石には神奈川県から来ている。静岡や大阪、あるいは北海道などと市町村のレベルで交流しているところもあるが、一般には、まだ受け入れがむずかしいといわなければならない。その他、一戸町、奥中山農協、衣川村、田野畑村などが比較的熱心である。

今のところ、農家で農作業を体験するというのが多いと思われる。したがって、宿泊料ではなく謝礼として支払いがなされる。

安代町は組織体制ができていて、役場と民宿で協議会を作っている。スキー場の入り込みが低迷していることと、夏場も集客を期待する通年指向が、その背景にあるいえるだろう。全般に気分としても盛り上がりを見せており、東和町では都市との交流が盛んになってきているし、葛巻でも畜産開発公社を中心として取り組みがみられる。こうしてながめてみると、市町村のなかでも、一定程度活性化がなされていたところにおいて、グリーン・ツーリズム事業への参加がみられるともいえる。

「食の匠」は岩手県の農業普及技術課が中心となり、高齢者や女性を主として対象としている。

グリーン・ツーリズムは、安代町で対応策を検討している。平成9年から、3回くらい会議をもち、4軒の民宿あるいはペンションが委員会に参加した。町全体の山や川が対象となる。今のところ思いつきを話しあっているところである。グリーン・ツーリズムという名前はいいのだが、はたして関東から客がくるのかどうかに関心の持たれるところだ。たとえば、大人なら、山菜採り、キノコ採りなどを、昔を懐かしみながらやる。子どもなら、魚つかみ、網すくい、自然観察といったところ。

また、平成9年には、手打ちソバをやったりした。そういうようにして、いろいろなことを組みあわせてやっていきたいとおもっている。

しかし、国が声をかけて各市町村がいっせいにはじめればどうなるのであろうか。横並びの金太郎飴の二の前とならないかと、心配する声も聞かれる。

グリーン・ツーリズムをどうするかについては、国の補助を受けて、安代町の農林課で計画書作成を行なった。これははじめたばかりではあり、今後の推移を注視していきたいところであるという。岩手県への登録となっており、現在は民宿の7戸と、ペンション53戸のうち10戸が登録している。温泉だけでなく、あるものを活用して新しい魅力の創出をはかりたいところである。たとえば、リンドウの直売とか宅配、ソバ道場などは、すでに有志で取り組んでいるところもみられる。あるいは、安比総合開発も、民宿と組んでやっている。

たとえば、星沢集落では、新たに誕生した村の施設を利用し、そこを核として野菜などの農産物の直売で1千万円以上の売上を残している例もある。これは施設の建設当時から構想していたものであって、その他、ソバ打ち、菓子作り、団子作りなど、特産品開発にも意欲的に取り組んでいる。

安代町はかつて「綿帽子」と称する地域おこしの補助金事業を、安比高原スキー場の近傍集落で実施した経験がある。これは、リクルートを中心としたスキー場開発が山の上だけで完結し、いわば「安比村」となって、客が麓の村へ流れて来ないことをおそれての対応であった。さらには、麓の村のみならず、町内の中心部へと波及効果を期待する取り組みであった。畑地区から新町、さらには田代地区へとつなげたいという構想である。

町としては、かつて細野や星沢という安比高原スキー場の近傍集落で取り組んだこの方式を、再度、他地区でも考えていきたいという。たとえば、長者前において温泉の探査を行っており、また、平成10年には、浅沢地区においても温泉調査を、地元が1/3、安代町が1/3、岩手県が1/3という負担区分で実行したい予定である。

以下では、民宿経営者のなかから、立花栄子氏に対する聞き取りを紹介したい。

県では地域で活動している人々を対象に、毎年30人に「食の匠」という称号を授与して

## 岩手県グリーン・ツーリズム推進協議会

市町村	体験の種目	ひとくちメモ	費用	受入れ者	問合せ先
	自然体験 林業体験	自然観察、森林歩き、源流そ 行、釣り、山菜・きのこ採り、 山菜・きのこの保存法	宿泊料 1泊2食付 8,000円から	石坂勇	農林漁業体験民 宿「ペンション ウイングライト」 ☎0195-73-5226
	キャンドル作り ガーデニング	郷土料理、押し花、きのこの 植菌体験も		石坂美智子	
安	野菜・花作業	そば、ジャガイモ栽培、かす み草摘取り、りんどう収穫	宿泊料 1泊2食付 6,000円から	立花徳彦	農林漁業体験民 宿「民宿かすみ荘」 ☎0195-72-5613
	山菜採り 野菜収穫	山菜採り、山菜料理、シイタ ケ収穫、ジャガイモ、トウモ ロコシ収穫	宿泊料 1泊2食付 7,500円から	矢部公輔	農林漁業体験民 宿「ロッジ・タンDEM」 ☎0195-72-5219
代	そば打ち 郷土料理	そば打ち、そば餅づくり、漬 物づくり、雑穀主体の「ふる さと料理」を開発、岩手県の 「食の匠」、食文化研究会「里 香味彩」代表、安代そば道場 代表	宿泊料 1泊2食付 5,500円から	立花栄子	農林漁業体験民 宿「民宿たちばな」 ☎0195-72-5221
町	高原体験等	山菜採り、放牧牛の世話、高 原野菜の収穫、リース作り、 山登り、キャンプ等	宿泊料 1泊2食付 7,000円から	農林漁業体験民 宿 田代平高原七時雨山荘 ☎0195-72-2103	
	そば打ち 農作業等	そば打ち、炭焼き、ブルーベリー作り、ジ ャム作り、じゃがいも掘り、とうもろ こし取り、焼き物、溪流釣り、登山		農林漁業体験民 宿 綿帽子の里・こぶの木 ☎0195-72-5992	
	山菜取り わら細工等	山菜取り、田植え、こま、竹 とんぼ作り、わら細工、押し 花体験、川遊び		農林漁業体験民 宿 民宿四季館彩冬 ☎0195-72-5344	
	森林自然体験	下るだけのサイクリング、森 の中での自己実現体験		万澤安央 ☎0195-72-3997	

いるが、安代町では初めて、平成9年10月にこれをウチワモチでもらった。

平成6～7年のシーズンから、スキー客の入り込みが落ちた。しかし、民宿の原点は、家族労働で冬場に働くというところにある。だから、客の入り込みに合わせてやればいいと考えている。平成6～7年のシーズンで、1日平均70人は入っていた。だから施設も増やしてきたが、だからといって過剰な投資をしたわけではない。客が来ないなら来ないなりに、雇の人たちに休んでもらって対応している。また、余った米で酒やおにぎりを出してサービスに充てる。

しかし、客の入り込みが落ち込みはじめたので、営業のため、はじめて東京に行ったのだった。行って東京の人たちと交流してみると（旅行会社の行事に参加してみても）よかったので、これを続けていくという。

東京と言えば、毎年のようにある大学から2人、アルバイトに来てもらっている。5年くらいになるが、昼はスキーをやり、2年くらいで1級を取っていく。日給は5千円くらいである。

民宿の手伝いとして、地元の集落から女性3人を頼んでいる。近くて楽だし、なんでも分かっている。その人たちは、リンドウ農家だから、客からリンドウの注文があったりして送っている。

客は切れ目がないくらいに来ている。工事とか、東北地方を回る外交員もいる。あるいは、ホッケーとかラグビーといったスポーツ合宿もある。修学旅行もこれから入ってくる予定がある。ここの建物は、もとはタバコの乾燥室で15年にもなるので、そろそろ改築の時期ではあるが、景気が悪いので様子を見ているところである。

スキー場ができて間もなく、ポプリという匂い袋をラベンダーで作って売り出そうとした当時は懐かしい。ここ星沢は12戸の集落だが、8人も北海道へ視察旅行に行くくらいだったのだから、あの時代はよかった。

無人販売は続いている。星沢の集落環境施設として大きい建物が中山間事業でできたので、それまでの建物は壊した。落成式には、嫁に出て行った人たちまで呼んだら60人くら

い集まった。手作りのオリとか、餅を作って、3千円会費で祝賀会を催したのだった。この施設の維持には、納税組合の還付金を充当する予定にしている。建物はできても中の設備は何もない状態だったので、調理台、ソバの籠、ソバ打ちの板、庖丁などをそろえた。囲炉裏も作って、平成7年10月～11月に11回のソバ打ち体験を行なった。いまでは、この集落だけで作れるようになった。

民宿もそして客も代替わりしている。隣の民宿は後継者が別のところで働くということをやめたし、他にも1軒やめたところがある。やすんでいる民宿も1軒ある。

グリーン・ツーリズムについてだが、ともかくも、自分が基礎からしっかりとやってから客を呼びたいと考えている。集客が先だという人もいるが、ソバなどを作る人を確保しなくてはならないという問題もある。ここには、見せるもの、絵になるものがあまりないという気がしている。ペンションの人が、たとえば炭焼きなどというが、さんざん苦労してきた地元の人からすれば、話しもしたくない事柄でもある。ヒエとかムギとかを入れればいいというが、この辺の人々は、ずっと雑穀を食べていたのだからコメを食べたくて仕方ないという気持もある。コメを食べるようになったのは、苗代にビニールを被せるようになった昭和40年頃なのだから。

グリーン・ツーリズムというが、来る人は、なんでもかんでも採りたがる。ガイドの養成もやっと始まったところ。各学区ごとに女性の指導員がいるのだが、有償とするように提案している。

それと、客は1人や2人では仕方ない、という意見もある。エージェントに頼んで、どっと大量に連れてきたらと提案する人もいる。

女性に関する団体を横につなごうとする動きもみられる。「八団体」が一緒になって、「未来を開く女性会議」を作ったのであった。そのなかには、婦人会、農協婦人部、商工婦人部、生活改善グループ、交通安全母の会、婦人消防協力隊、食生活改善協議会、母子福祉協議会が含まれている。活動としては、総会と講演会が中心だが、地区館に声をかけて踊りをやったりもしている。地区館というのは生活改善センターや公民館として、畑、

荒屋、五日市、浅沢、田山、館市にある。

安代オリンピックという行事を4年に1回行なっている。体育協会ごとに出場するが、体協は、細野、畑、荒屋(A・B)、五日市、浅沢、田山(上・下)、館市、兄川の10ヶ所に置かれている。



## 6. サッカー・グラウンド造成の取り組み

安比サッカーグラウンドについては、細野地区の民宿経営者が自助努力により造成した珍しい事例である。

平成7年に、有志4～5人が組んで、サッカーの合宿を誘致したのが、近年では目を引く試みであった。当初において使用されたサッカー場は、実は安代町にはなく、隣村の松尾村のグラウンドを借用したものであった。合宿や試合による入り込みを実績として地元民に提示するなかで、地元民が自律的に誘致を拡大したという、希有な事例となっている。

そんななかで、安代町、特に細野地区で特徴的なのは、グリーン・ツーリズムをスポーツとミックスしようという動きであろう。夏期のスポーツマンの合宿を、たとえばサッカーなどで行ない、そこへグリーン・ツーリズムを取り入れるというやり方である。アイデアとしては、たとえばジャガイモ堀り、トウモロコシ狩り、花摘みなどが出されている。ちょっとしたことだが、実際にあったこととして、隣家のトウモロコシのことがある。もう捨てるようなものだったが、それを客に採らせて売ってやる、というようなこともあったのだ。

平成8年に樹木を伐採し、測量は「目分量」であった。草を刈ったり。畑は1町2～3反、林が2町7～8反、全体で4町歩くらいの面積である。土地は、メンバーの一人の所有地で、年間で16万円の賃借料で30年契約となっている。メンバーは40歳から60余歳までの6戸(民宿)で、すべて「二世を持っている人」で作ったというのが重要な点である。

グラウンドの造成は花(リンドウ)で忙しい時期だが、やれる人でやった。松尾のグラウンド2面はラグビーに貸していたためかなり荒れていた。整地しても、また使われて荒れるという有様だった。そういう状況だったので、それなら自分たちでやろうということになったのだ。

ラグビーは一般に高校生からだが、サッカーならもっと小さな子どもたちからだから、層も厚いといえる。

グラウンドはサッカー以外にも多目的に使えるからいいと思っている。

サッカーの関係者が関心を示していることの一つに、「学校林」があるという。「林」という自然が、サッカーグラウンドに隣接して存在することが、サッカーの指導者たちにはヨーロッパ・スタイルとして好評である。その意味では、学校（細野小学校）は残したいが、しかし、子どもが少ないため父兄の負担が大変に大きい。

芝は、ゴルフ場の関係者からノウハウの提供を受けていた。平成10年7月のオープンにむけて、ゴール・ポストの入手、防球ネットの建設、水道の敷設など、やらねばならぬことは多い。

現在は3面だが、あと3面ないと雨の時に運営が難しくなる。できれば現在の場所にかためて増設したいが、無理となれば、離れたところでも仕方ないと思っている。

作るにあたっては、当初は30万円プラス10万円、計40万円を6戸で出し合った。また、借り入れも、1人500万円、起こした。1戸当り年間に1,000泊、1人当り500円として計50万円と見込みたい。管理費としては、肥料や砂にかかる。年間10,000泊で200万円くらいが経費と予想している。

安代町も大きな大会を開催するとなれば、協力を約束してくれている。

入り込み客は、6戸に入りきれず、他の民宿にも協力を依頼したほどである。50人～60人が2ヶ所、40人が2ヶ所であって、いずれも年に2回というところだが、こういう形で「波及効果」もみられるわけである。

冬の民宿と夏場の農業（リンドウ）と、そして、サッカー場の経営をどう組み合わせるのか。3月末まではスキーの民宿で多忙。リンドウは7月末に終えるようにする。花は、かつては、面積の目一杯を栽培しようとしたが、考え方を変えて、今は、ポイント、ポイントでやるというようにする。

## 7. おわりに

安比高原スキー場を事例として、地元で現在取り組まれているところの「グリーン・ツーリズム」を中心に、その現状と問題点を探ってきた。以下では、そこにみられた特徴のいくつかを指摘しておきたい。

まず、グリーン・ツーリズムと称される政策についてであるが、安比高原スキー場の近傍集落の民宿のなかでも、比較的余裕のある層において、意欲的に取り組まれていることが分かる。しかも、それらは集落や地区の組織や施設を巧みに利用しながら展開されているといえよう。

また、重要な点であるが、不況の影響もあって、民宿のなかでも現在は急速に差別化が進行しており、いわばサバイバルをかけての真剣な取り組みがなされていることにも留意しておきたい。

他方で、民宿のなかには、みずから手で集客の手だてをこぎずるだけの力量を備えている層も出現している。この場合も、細野地区でのスポーツ施設（サッカー場）の建設においては、有志共同という形がとられており、今後も、こうした共同による対応が増すように思われる。

また、農村が都市と交流するなかで、あらたな可能性を探る試みとしても、サッカー場の例は興味深い。ここにおいては、蓄積されていたスキー場民宿の経験が、あらたな形で活かされていることにも気付くであろう。地域間の交流が今後はどのように推移するのか見守ることが重要である。

本報告書収録の学術雑誌等発表論文は本ファイルに登録していません。なお、このうち東北大学在籍の研究者の論文で、かつ、出版社等から著作権の許諾が得られた論文は、個別に **TOUR** に登録しております。